

目次：

国際グッドプラクティス	P.1
富岡丈朗教授： 「ボランティア援助技術」	
A. H. バウマン准教授： 「ドイツ語Ⅱ」	P.2
葛城（池田）裕美准教授 「臨床栄養学特別実習」	P.3
授業評価アンケート 集計結果	P.4

## 1. 国際グッドプラクティス

今回は富岡丈朗准教授の「ボランティア援助技術」の授業、A.H.バウマン准教授の「ドイツ語Ⅱ」の授業、葛城（池田）裕美准教授の「臨床栄養学特別実習」の授業にお邪魔しました。どの先生の授業も双方向的に展開されて、活気のあるクラスでした。



### ① 国際援助の実践知：富岡丈朗准教授

**授業レポート（豊川和治教授）：**この科目は国際総合政策学科「国際協力コース」の3年次で開設されていて、NGOやNPOでボランティアとして、国際的な援助活動を行う場合の企画・立案、及び実施・評価の方法を、より実践的に学ぶための授業である。

近年、国際援助活動は多岐の分野にわたり、また国際情勢は極めて早く変化するため、「教科書を作成してもすぐに陳腐化する恐れがある」と担当の富岡先生は語る。それだけに、クラスで国際援助活動の現状を学ぶために、「JICAや外務省、また各NGOのプロジェクトをレポートするWebページを教材として、クラスで学んでいる」とのことだ。

しかし、このクラスではこのような国際援助を「座学」で学ぶのはほんの一部分の時間で、より多くの時間は、ある国際的援助プロジェクトをグループワークで立案・計画し、クラス内で「ロール・プレイ」を行いつつ、シミュレーションにより学ぶことが、大きな特徴といえる。

このクラスは100人以上受講しているため、約10人を1チームとするワーキング・グループが、現在10チーム活動している。クラスを訪問した時は、「現地住民をボランティア・チームが訪問し、聞き取り調査を行う」というシナリオで演習していた。1チームの約半数が「現地の人々」、残りが「訪問するボランティア」という役を引き受け、夫々が「シナリオ」を設定する。

「現地の人」組は、村の生活環境、暮らし、生計を何で立てているか、何が不足で困っているかを、できるだけ実態に即するよう考案し設定する。あまりリアリスティックでない設定を行っているため、レビューアの先生からOKがもらえないため、やり直しとなる。

「ボランティア」組は、現地の人の実情をつかみ、本音が聞けるように、的をついた質問を考える。相手の答え方次第では、あらかじめ考えた質問ではない質問も、臨機応変にしなければならない。この点についても、レビューアから、びしびしコメントがあるので、油断はできない。

各チームで、「シナリオ設定」、「インタビューの実施」が終わると、各チームの「ボランティア」組は、援助プロジェクトについて、何を援助するのかしないのか、その理由、実施する場合はその必要予算額について発表することになる。「現地の人」側からは、ボランティアが現地の実情をどれだけ正確に理解できていたかを明らかにする、という次第だ。

自分のチームで、援助活動について、実際「役割」を演じることで、よりリアルに学べることは多いし、他のチームの発表を見聞きすることにより、より多様な援助活動についても学べる授業だと感じた。

## ②ドイツ語を味わう：A.H.バウマン准教授



**質問（長嶺宏作助教）：**「ドイツ語Ⅱ」では、バウマン先生が何度も「ここについては眞道先生・田中先生の授業で間違わないようにして…」というように、ドイツ語のカリキュラムに系統性があるなど感じましたが？

**回答（A.H.バウマン准教授）：**「ドイツ語Ⅱ」は1年生が取る授業で「ドイツ語Ⅰ」とセットで教員がペアになって、共通のテキストを使って進めています。「ドイツ語Ⅲ、Ⅳ」もペアになって行っています。この授業では清水智裕先生（非常勤）が文法と語彙を中心に行い、私がコミュニケーションの授業を行っています。

**Q：**授業の中でも学生が青い顔して、試験のことを聞いてましたが、試験も統一で行っているんですか？

**A：**はい。期末試験に1週間ぐらいにわたってやっています。行っている試験は、リスニング・ライティング・リーディング・スピーキングの4つで、他のものは1日で終わりますが、スピーキングは3日くらいかけて、教員と1対1で試験をします。スピーキングの試験を受ける前は緊張していますが、終わるとみんな笑って帰っていきますよ。

**Q：**評価もしっかりやられているんですね。さて授業についてですが、今日、私が勉強になったのは語学の授業で、焦点が一人ひとりに当たっているということです。日本の学校でコミュニケーションや発音を教える際には、コーラスリーディングを良くやりますが、バウマン先生は一人ずつ発音させて、一人ひとり文法の間違いや発音の間違いを訂正していましたね。

**A：**それは人数の問題もありますね。私は学生に全員の発音をチェックできないと言っています。でも、コーラスリーディングでは全員の発音がハーモニーとなり、一人ひとりのはチェックができない。だから、隣の人が、どういうテンポで発音しようが気にせず、自分の声だけを聞いて練習させています。それから4、5人に一人ずつ発音させています。必ず発表する時間を作っています。後、授業では、強制的に話させるのは嫌いなんです。コミュニケーションは自分が話したいと思って、話すものでしょ。目の前の人に向けて話すのに、ただみんなと声を合わせても意味がないでしょ。やる気は自分の中から作りださなきゃいけない。そのために私は、授業協力・授業参加を学生に求めて、評価しますと伝えているし、自然に声が出る環境が出来る環境をつくるようにしています。

**Q：**授業では先生の問いかけに対して、自然にあちこちから声があがっていましたね。また、授業ではドイツの名刺文化を話して、名刺を使って自己紹介のコミュニケーションの学習内容に展開していくのは、見事でしたね。

**A：**授業では学生が集中するように、ダイナミックに授業を展開しています。学生が疲れたと思えば、突然、「3分休憩！」と切ったり、学生を動かしていきます。授業内容も文法に15分程度、文化の話しに15分程度を使って、残りをコミュニケーションの授業にして、いろいろな内容をいれています。私の授業では学生は眠りません。眠る暇を与えません。

**Q：**授業の構成でいえば、最初に前の授業の復習と最後に次の授業への接続が意識されましたね。

**A：**授業では前の授業の内容をいれて、「〇〇やったよね。覚えている。自分で言える？」とか言って学生たちの頭を刺激していきます。少し前の授業と後の授業がオーバーラップすることで思い出させます。もちろん、そこで「全然わかってないじゃん」ということになれば、補足して説明します。今日も文法が理解できてなかったの、非常に単純化した形で説明しました。もしかしたら、それで家に帰って復習するかもしれない。ドイツ語をブツブツと味わうように練習するかもしれない。最後に、今日は次の授業が料理についての会話文なので、料理に関する話題にして終わりました。それは今日つかった構文から、次の構文課題を意識して、オーバーラップさせています。私の授業では、学生たちが自然に声のでるように働きかけています。その狙いは「自由ほど厳しいものはない」つまり、学生は自己管理しなくてはならない。それを学生がプレッシャーに感じることもあるかもしれないが、それを乗り越えてほしいです。

**Q：**熱い授業を今後も期待しています。

（インタビュアー・長嶺宏作）



### ③ 医療現場と栄養学をつなげる：葛城（池田）裕美准教授

**質問（太田尚子教授）：**葛城先生、こんにちは。今日は先生の教育法についてお聞かせください。

**回答（葛城裕美准教授）：**私の教育のモットーは、社会で即戦力のある栄養士の育成を目指すということです。

**Q：**先生ご自身、本学の栄養士課程をご卒業されていますが、当時の学生と今の人たちではだいぶ異なるでしょうね。そのような中で先生が常々工夫されている点を具体的にお教えいただけますでしょうか？

**A：**これは臨床栄養学特別実習という、短期大学部専攻科の科目です。そこでこの科目の目標を、より高度な食物と栄養に関する専門知識と実践的スキルを身につけた食の専門家養成することとし、まず第一に考えていることは、現場の状況に即したリアリティーのある、患者の立場を考え、擬似体験する点に重きを置いています。具体的には、最新の治療用特殊食品を常に取り入れ、嚥下障害食の実習などでは、まずDVD等の映像を使い、身体のメカニズムを視覚的にとらえ、確認して学習した後に、はじめて調理実習に入るようにしています。また実習を通して学習したことの表現をするツールとしてレポートでは、医療現場の実際にそくし、毎年最新の内容を取り入れるよう努めています。また提出されたレポートに対しては個別添削を行い、より完成度の高いレポートを作成できるよう導いています。



実習の様子



最新の経腸栄養剤



咀嚼嚥下障害食

**Q：**個々の学生さんに対する御指導とのこと大変でしょうが大切なことですね。学生の皆さんに、この実習を通して、最終的にどんなことを身につけてもらいたいですか？

**A：**専門知識、技術、熱意、愛情、命に携わる責任感、コミュニケーション能力、協調性、行動力、そして人間形成能力です。

**Q：**この科目は2年生の夏休みに予定される校外実習に備える大切な位置づけとなっていますね。今日の葛城先生のお話を伺っていると、現場を熟知された先生の教育に関する熱意を手取るように感じる事が出来ました。お話、本当にありがとうございました。

（インタビュアー・太田尚子）

# 3.H24年度後期授業アンケートの集計結果について

表1 国際関係学部 科目区分別平均値

	平均値	中央値	標準偏差
1. 教員は学生の理解度や反応に配慮して授業をした。	4.29	4	0.79
2. 授業に対する教員の熱意が感じられた。	4.37	4	0.74
3. 教員の声、態度、言葉遣いが適切であった。	4.38	5	0.75
4. 学生から質問や相談があった場合に教員は適切に対応した。	4.35	4	0.75
5. 各授業ごとの内容量は適切であった。	4.27	4	0.79
6. 授業内容は十分に満足できるものであった。	4.27	4	0.82
7. 授業内容はシラバスに示された目的や方法に沿って行われた。	4.26	4	0.76
8. 教員は学生の意欲を高めるような工夫を行っていた。	4.17	4	0.87
9. 成績評価の方法が具体的に説明されていた。	4.28	4	0.79
10. 教員は十分な授業時間を確保した。	4.37	5	0.74

表2 大学院国際関係研究科 科目区分別平均値

	平均値	中央値	標準偏差
1. 教員は学生の理解度や反応に配慮して授業をした。	4.9	5	0.3
2. 授業に対する教員の熱意が感じられた。	4.9	5	0.3
3. 教員の声、態度、言葉遣いが適切であった。	4.9	5	0.3
4. 学生から質問や相談があった場合に教員は適切に対応した。	5	5	0
5. 各授業ごとの内容量は適切であった。	4.9	5	0.3
6. 授業内容は十分に満足できるものであった。	4.9	5	0.3
7. 授業内容はシラバスに示された目的や方法に沿って行われた。	4.9	5	0.3
8. 教員は学生の意欲を高めるような工夫を行っていた。	5	5	0
9. 成績評価の方法が具体的に説明されていた。	4.9	5	0.3
10. 教員は十分な授業時間を確保した。	5	5	0

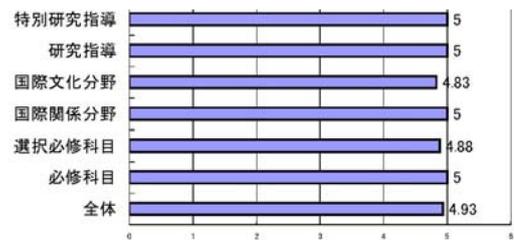
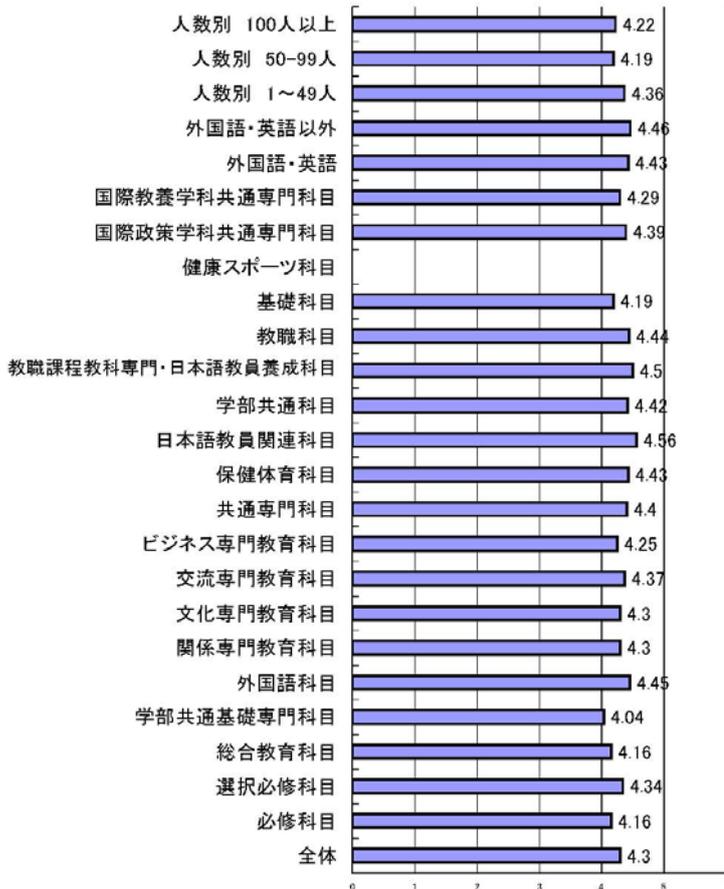
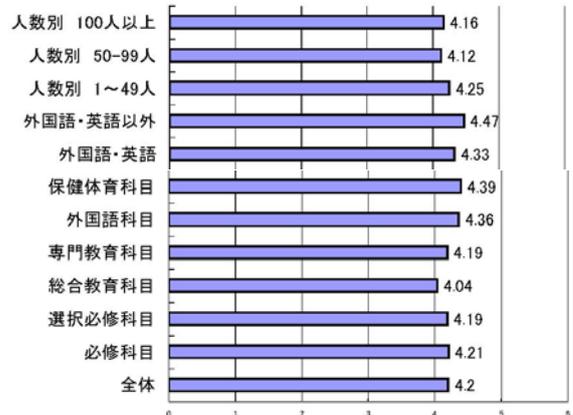


表3 短期大学部 科目区分別平均値

	平均値	中央値	標準偏差
1. 教員は学生の理解度や反応に配慮して授業をした。	4.19	4	0.76
2. 授業に対する教員の熱意が感じられた。	4.28	4	0.71
3. 教員の声、態度、言葉遣いが適切であった。	4.27	4	0.74
4. 学生から質問や相談があった場合に教員は適切に対応した。	4.26	4	0.74
5. 各授業ごとの内容量は適切であった。	4.16	4	0.77
6. 授業内容は十分に満足できるものであった。	4.17	4	0.78
7. 授業内容はシラバスに示された目的や方法に沿って行われた。	4.19	4	0.72
8. 教員は学生の意欲を高めるような工夫を行っていた。	4.05	4	0.84
9. 成績評価の方法が具体的に説明されていた。	4.17	4	0.76
10. 教員は十分な授業時間を確保した。	4.22	4	0.76



国際関係学部授業評価アンケートのH24年度の全体平均は前期が4.22、後期が4.3でした。経年変化をみると、H22年度前期が4.2、後期が4.3、H23年度の前期が4.17、後期が4.22と変化しています。全体の推移としては、ほぼ横ばいといって良いでしょう。

短期大学部のH24年度授業アンケートの全体平均は前期が4.14、後期が4.24でした。経年変化をみると、H22年度の前期が4.0、後期が4.1、H23年度の前期が4.0、後期が4.16と変化しています。短期大学部も全体平均は、ほぼ横ばいといって良いでしょう。大学院も継続して、受講人数がすくないこともあります、高い評価となっています。

特記されることは、非常勤の先生方の回収率が非常に良いことです。50%を大きく上回る有効回収は、他学部に比べて特出しております。アンケートが周知されたことと、何よりも教職員と非常勤の先生方のご努力のたまものと感謝いたします。

(文責・井上桂子)

## FDニュース

発行者：日本大学国際関係学部  
FD委員会

FD委員会委員長：井上 桂子

FDニュース小委員会：

長嶺宏作・豊川和治・雨宮史卓・太田尚子

2013年7月25日発行